

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
C-30C	16-101	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
<p>Heterogeneous impact of alcohol consumption according to treatment method on survival in head and neck cancer: A prospective study.</p> <p>頭頸部がん生存率への飲酒の影響は治療法により異なる：前向き研究</p>		
執筆者		
Sawabe M, Ito H, Oze I, Hosono S, Kawakita D, Tanaka H, Hasegawa Y, Murakami S, Matsuo K..		
掲載誌		
Cancer Sci. 2017 Jan;108(1):91-100. doi: 10.1111/cas.13115. Epub 2017 Jan 26.		
キーワード		PMID
頭頸部がん、飲酒量、放射線、手術、生存率、交絡		27801961
要 旨		
<p>目的： 頭頸部がん患者における飲酒量と予後の関連について、治療法別、原発部位別に検討する。</p> <p>方法： 2005年～2013年に愛知県がんセンターを訪れた原発性の頭頸部がん患者を5年間追跡し、自己申告の飲酒量（非飲酒・少量・中等量・多量）と生存率の関連について、コックス比例ハザードモデルを用いて、治療法別（手術・放射線）、原発部位別（喉頭・中咽頭・下咽頭・舌・その他口腔）に検討した。</p> <p>結果： 対象者427人（男性78.1%、喉頭咽頭がん221人、口腔がん206人）を平均48ヶ月間追跡し、全体の5年生存率は68%であった。全体では、飲酒量が多いほど予後が悪く、多量飲酒者の死亡は非飲酒者の1.91倍だった(trend p=0.038)。治療法別の解析では、喉頭咽頭がんで放射線療法を受けていた141人では飲酒量が多いほど予後不良だったのに対し(trend p=0.034)、手術療法の80人では飲酒量と予後に有意な関連は認められず、治療法によって飲酒量と死亡の関連が異なることが確認された(交絡の p=0.048)。原発部位別の解析では、手術療法を受けた口腔がん患者のうち、舌がん患者では非飲酒者に比べて中等量飲酒者の死亡が11.7倍、多量飲酒者で3.07倍であり有意差が認められたが、その他の口腔がん患者では飲酒量と生存率に有意差は認められなかった。</p> <p>結論： 本研究の頭頸部がん患者では、飲酒量が多いほど予後不良であったが、この関連は治療法によって異なり、また、がんの原発部位によっても異なることが示された。</p>		